

「太陽」と「女」

——創刊期の様相

相原和邦

問題の所在

雑誌『太陽』はどういう性格を持っているか。それは、政治欄から家庭欄にわたる領域を備え、二〇〇ページを越える分量を有している事実が端的に示しているように、多様性、総合性を武器とし、目標としては当時の人々全体に開かれた普遍性をめざしていたといえよう。「我国未曾有の大雑誌」(『都新聞』)「上に統一する所なきが故に下能く雑多の分子を含有す」(『早稲田文学』)という評価を得た所以もそこにある。とはいえ、少なくともこれまでの社会で

は、あらゆる階層にわたる普遍的言説の完全な実現は果たされてはいない。編集者、執筆者は、たとえ漠然としたものであっても、特定の読者階層を主軸として想定しており、出来上がった雑誌が、結果的にせよ、一定の主張や思想傾向を潜在させることは否定できない。

ここでは、日本の男女、特に女性がどのように描かれ、それは、太陽と月というシンボルとどう関わってくるのかを追跡することにより、この雑誌の性格を解析するとともに、当時の日本像および日本人像を明かにしてゆきたい。スペースの関係上、

『太陽』の第一巻第一号から同じく第五号までの創刊期に限定し、創刊号および小説欄を中心として分析してゆくことにする。

第一章 『太陽』創刊号

創刊号の『太陽』は、日輪尽くしといっても、過言ではない。まず、表紙からして、周知のように陽光が地球を照らし出すさまが大きく描きだされている。これをめくれば、口絵にも、さまざまな日章旗が描かれ、「戦捷の元旦」という題がつけられている。大橋乙羽による発刊の辞「太陽の発刊」にも、「新旭光」の文字が躍っている。

なかでも目を引かれるのは、「日章旗」と題する一文が掲載されていることである。その名も「旭日生」というペンネームを持つ筆者は、ここで、「大日本帝国の紀章たる旭日の光」と明記している。日本帝国のシンボルということがはっきりと自覚されているわけである。日章旗の持つ趣は、「美麗」で「莊嚴」であると形容され、日本の地理上の位相に言及して「旭章のよく適當する位置」としている。

また、歴史上の検討を加えて、中世の武家時代の旗は「日月併用」であり、必ずしも日の丸に限定されてはいなかったし、徳川時代には「朱の丸」と呼び、主として、「船の旗」に用いられたが、国旗という認識は成立していなかったと指摘している。当代、先行した他の国々が日の丸を採用しなかった幸いにふれ、「遅蒔きに採用して残り物の福を拾ひしはわが大帝国の運強き前表」と慶賀している。

太陽を素材、モチーフにした文章は、他にも幾編か、数えあげることができる。

「文苑」の欄にこれが多く、たとえば、依田学海の「賀発刊太陽序」には、「太陽者日也。古以日月比天子」という語句があり、同じく、石川英の「祝太陽新刊序」には、「日者太陽之精」という把握がある。さらには、「日出之邦太陽出（大久保湘南）」

とざせる闇を開きつゝ
おほへる雲を払ふなり
(中略)
天と地とにまごゝろの
歎こびをもて迎へられ
日の大王はうるはしき
光線の衣を身にまとい
むらさきいろの絹笠を
さし細させて出ませり

とりわけ注目されるのは、佐佐木信綱の、「太陽の歌」というそのものずばりのタイトルを持つ長詩である。

(後略)
この詩は、六連七五行全編が太陽賛歌に貫かれ、「日の大王のいでましに」「日の大王はうるはしき」「日の大王の御ちからに」「日のおほきみの御恵は」「もしも此世に日の王の」「日の大王の御ひかりは」「日のおほきみは永久に」「日のおほきみの御光は」といったリフレインが、くりかえされている。「日の大王」が、天皇とダブル・イメージとして意識され、「光りかはらぬ日の王はもとるうごかぬ日本の富士の高嶺を出まして世界を周ねく照らします」で結ばれる後半部分には世界制覇の響きさえ感じら

玉をいらかに鏤ばめて
瑠璃もて磋ける宮殿に
夜の世界をしろしめす
月の女王は入りましぬ
胸の装飾のきらめきし
侍女の星はつきそひて
一つひとつに静かにも
清きひかりを隠したり
日の大王にいでましに
風は道をば清めんと

玉をいらかに鏤ばめて
瑠璃もて磋ける宮殿に
夜の世界をしろしめす
月の女王は入りましぬ
胸の装飾のきらめきし
侍女の星はつきそひて
一つひとつに静かにも
清きひかりを隠したり
日の大王にいでましに
風は道をば清めんと

れる。

他方、女性にも、「朝日さす梅のはやし
のしらゆきのとくるこずゑに鶯のなく」
(下田歌子) という太陽賛歌がある。

さらに、「家庭」欄にも「初春には生を
殺さず罪科を行はず、初日の出を祝ふこと
は、陰暦の正月朔日も、方今陽暦の一月一
日も異なることなし」(新年の礼式 有住齋)
という教えがあり、「天津日嗣いよいよ
きはみなく(正月 乙羽庵主人)」という
天皇との関連づけもある。

さて、女性の取り上げかただが、雑誌
『太陽』の中にしめる女性の比重はきわめ
て軽いいわざるをえない。まず、割かれ
ている量からして、わずかのスペースにす
ぎない。

執筆者にしても、女性は「文苑」の中の
短歌に限られ、鍋島栄子、下田歌子、柳原
愛子、西升子、竹屋雅子、森策子の六名を
数えるだけである。与えられている紙面は
半ページにも満たない。

女性に関する記事に目を配っても、「婦
女の令名」(寒澤振作 家庭)、「婦人の生
涯」(米国ハーバース月報) 海外思想
の二編のみである。

その内容にふれると、前者は、「淑女」
「良妻」「賢母」を尊び、淑女は「一通りの
教育を受け」、「外国語の少々も心得あ」る
こと、良妻は家の「内政」を担う者であり、
「容易き事柄などは代理して」夫を扶ける
こと、賢母は「胎教」を心がけ、「小児の
泣くは肺臓を広く為すの益もある」のをわ
きまえることが大切とされている。新時代
の知識を持ちつつ、内助の功をあげる必要
が説かれている。中でも、肝要なのは淑女
であり、「淑女は源泉」とされているので
ある。後者は米国の論の翻訳であり、「婦
人の進歩は男子の生涯を占領して婦人的と
いふよりは寧ろ男子的とならんとするか或
は婦人としての機能の未だ開発せられざる
ものを発達せしめんとするか、これぞ婦人
教育に関する最大疑問といふべきなり」と
いう問題提起から出発して、婦人としての

位置を守り、婦人としての機能の開発に努
めるべきだと主張している。

つぎに、女性イメージに広げれば、石橋
忍月の「霜の美」というエッセイが、「霜
の美は月夜に在り 青女は霜裡に在り、娘
蛾は月中に在り」(雑録)としていて、女
性が月と結びつけられている事実が目さ
れる。先に引いた「太陽の歌」は、「夜の
世界をしろしめす 月の女王(きさき)は
入りましぬ」で始まっており、やはり、月
は女性の表象とされていた。

また、女性を描く場合、ことにその母性
的な面が強調されている。「太陽の歌」で
は、「母の乳房にすがりつゝ 眠れるちご
を除きては」という詩句が見られるし、同
じ佐々木信綱の「折にふれたる」と題する
雑詠三首の筆頭は「たちちねの乳房ふくみ
てねたる子の心や神のこゝろなる覧」であ
る。

森策子の「懐征遠」と題する短歌も、男
性歌人のますらお調のものとは違って、我
が子を思う母の心情がこめられている点で

万葉集の防人の歌に通うものだが、「さゆる夜もつゝとりもちて唐土の荒野の末の月や見るらん」という角度で、母性と月が結びつけられている。

ちなみに、「家庭」欄掲載の有住齋「新年の礼式」で一ページがあてられた挿絵「正月遊びの図」も初日の光のなか、洋装して凧を持つ少年のベレー帽の頭を後ろからなでる羽織姿の母親が描かれている。

この他では、皇室の消息欄に、皇后・皇女の記事というかたちで、かろうじて女が登場している。

以上をふまえて、大胆にまとめれば、「太陽」はいわば男の雑誌である。グラビアや肖像もほとんど男ばかりである。この点、女のグラビア、挿絵を多出する『文芸倶楽部』と好対照をなしているといえよう。

第二章 小説——太陽と月 男と女

それでは、本稿が中核とする小説欄には男女はどのように描かれ、太陽と月の表象はどのように扱われているのだろうか。

創刊号の小説欄の筆頭を飾るのは、尾崎紅葉の「取舵」である。これは、八人の舟子を備えながらも、嵐に翻弄されるはしけを一人の老人が救う話なのだが、「やがて日光の雲間を漏れて、いまは名残無く乾きたるにぞ、蟄息したりし乗客等は、先を争ひて甲板に顕れたる」とあるように、救いとしての太陽が描き出されている。

この太陽が隠れると、「日光の隠顕する毎に、天の色は」激しく異状を示したり」とされ、「天色は俄に一変せり」「日は将に入らむとせるなり」とされているように、魔の時が訪れる。

主人公は「老ひて盲なる」人なのだが、精神分析学においては、「盲」は去勢の象徴とされる。結末では、この主人公が一大活躍をして船と乗船者を救って「活大権現」と呼ばれ、実のところ「加賀の銭屋内閣が海軍の雄将磁石の又五郎」であることが、明かされる。この作品は、いったん失った男性性をとりもどす話であり、「男」の世界の顕現として太陽が意識されている

ことが注目される。

それでは、女性はどうのように描かれているか。

「此内（下等室、筆者注）に留りて憂目を見るは、三人の婦女（をんな）と厄介の盲人（めしひ）とのみ」とされ、船酔いで「嘔き、且呻き」苦しむさまが描写される。「婦女等は苦悶に苦悶を重ねて、人心地を覚えざるもありき」という叙述もある。「盲人」は「大権現」に変貌するが、「婦女」は、終始「正体無く領伏したる髪の毛に汚穢を塗らして」ととらえられ、弱く見苦しきものとされている。女性美の活写を得意とした紅葉にして、このような女性観をひきずっていたのである。

創刊号掲載の今一つの小説は、饗庭篁村の「従軍人夫」である。これは、「大地震」が原因で実の親の長助にも養父母にも別れた長吉が艱難辛苦の末自家を商売繁盛に導くが、「今の世の有難さ」に感じ、「金を海陸軍備中へ献納」しただけでなく、「清国征伐」に加わり、主従二人で従軍人夫とな

って国のために力を尽くすというストーリーである。一種の「ますらを物語」であり、日清戦争を直接の背景にしている。

女性描写はといえば、「片手で乳房をいぢりながら私が顔を見て笑ひかけます」「張る乳を、吸て貰ひて」といった具合に、もっぱら母性が強調されている。他に「氣を強くは持たれど弱るは女の本性とて」という叙述があるように、ここでも女は弱きものとしている。また、「宵月の空眺めして内に入り」「おさめはオロく／＼ホロく／＼と膝には露を受けながら」として、女性存在が月と結びつけられている。

さらに、「後妻のお鶴といふは屋敷出の物堅きに似ず商ひに賢く、夫を大切と事(つか)ふるに、長助俄に人品を上げ」という位置づけが、「婦女の令名」の内助路線と一致しているのも興味深い。

『太陽』第二号には、川上眉山の「書記官」が掲載されている。時代背景は、やはり日清戦争だが、「彼の炭山(木島鉱山)が手に入れば、例の失策の株以来、手ひど

く受けた痛みも」「日清事件の影響から、海産物に及ぼした損失も、これで埋合わせがつくといふもの」という独白があり、株ならびに日清戦争のマイナス面がとらえられているのが、留意されよう。

書記官奥村辰弥は、「散歩には詔向といふ好い天気」のとき、あくまでも紳士を装って、政商三好善平の美しい娘光代への接近をはかる。また、辰弥と善平との密談は「銀燭は輝き渡りて客は漸く散じたる跡に、残るは辰弥と善平なりき」として、昼の顔と夜の顔との落差が描かれている。

ヒロイン光代の描写は「細面の色は優れて白く、すらりとしたる立姿は」「自ずからなる百の媚びは」とやや典型的ながら、その美しさがたええられている。また、いわずの綱雄に対し「光代は播寄つて顔を覗込み、美しき手を膝に掛けて、貴郎は其様にもお帰りなさりたいの」とする、大胆さ、なまめかしさがあり、父に対して「ぢれたい。父様ア。とばかり果ては耳を引張る」という、お転婆ぶりも發揮して

いる。後半、綱雄を訪ねて会うことができず「すごく」として引き返したる光代の、払ひもあへぬ後れ毛を吹き乱すは、いかに身を知る秋の風なりし」という暗転には、綱雄との仲を割かれて辰弥の餌食になる結末の予感がこめられている。

第二号のいま一つの小説は、三宅雪嶺夫人三宅花園の「露のよすが」である。画家広橋との見合いに破れた露子が四年後美術会に出品した絵が評判を呼び、当の広橋にも賞賛されるといふ筋である。見合いの朝の「今日の晰しなりて、嫁様といつかれては、まさかに障子の日影に、おくるゝ程の、おろかもものにもあらざるべし」といわれる遅起き、見合いを終えた後の「日は西にかたむきて斜に玄関へさし入る頃、待久しげに門守りし犬を先立てゝ、馬車は玄関へ引入れられぬ」という情景描写は、それぞれ朝と夕の時刻を表示するとともに、いわば太陽に背かれたヒロインの立場を暗示している。

女性描写としては、「そろへたる白襟に

領元（えりもと）うるはしくて、いつもの露子のおもかげもなく、おもはゆげにてさしうつむくは、王昭君の恨みのそれならねども」には、類型的ながら、和服の女性美が描かれている。また、「何事も女は内端に、さしいです、人の言葉を酌みわけて、大やうに随ひたまふがよし、今迄のやうに口迅く物いひたまふは此上なく賤しくて、人柄をおとすもの」には、当時の女性のところがけが示されている。

これは女性作家の初登場の作品だが、男性作家に比して与えられたスペースが少なく、無理に圧縮したような筋書きで分かりにくくなっている。

『太陽』第三号の小説は、須藤南翠「吾妻錦絵」である。ここで目に立つのは、冒頭部分が旭日と日章旗への言及で始まることである。「明治二十八年の第一日の曙光」という設定で描き出される太陽および日章旗の描写と意味づけは、一ページを優に越えている。

我が大日本民族は幾億万の人類に先だ

ちて新年第一の太陽を拝するなり、年は世界の万邦に先ちて我が日本帝国より立ち初むるなり。君を寿ぎ国を祝ひて国旗は檐頭に立てられたり。美しき太陽は幾万といふ数知らぬ小太陽を輝かしたり

これにはさらに「渠等が仰ぐ初杲（はつひので）の光線中には、我が泰東第一国の国旗、軍旗、軍艦旗、祝捷旗、万歳旗の影を包容せらるゝなり」といった説明が続く。いわば、太陽づくし旗づくしであり、創刊号の口絵そのままである。この口絵に刺激され、それと結びついた日清戦勝が、執筆のモチーフになっているのは明かである。

ところで、この小説は、「実に本年ばかり勝れて楽しく勝れて慶ほしき正月はあらざるべし」とされ、「万都を旗もて飾られたる」中、「松をも立てず、注連をも結はず、門の戸堅く鎖し」た家が一軒だけある。そこでは、前年暮れに没した秋津武夫大尉の妻節子と幼子の勲が喪に服しているのである。

この作品には、日章旗以外にも日清戦争の影が色濃く反映している。たとえば、「清は皇国の讐なるぞ、東洋平和の讐なるぞ」という征清軍歌が歌われる。また、「阿父様は子、明治二十七年十二月二十八日に、新占領地満州盛京省の金州城で、御死去遊ばしたといふ事をお忘れなさるな」という母の言葉があるように、勲の父は、この戦役で奮戦の末戦死したのだが、従軍した「油絵師」が、「大尉自ら敵壘に先登奮戦したる実況を描い」た絵を「絵草紙店」が「奉書摺の錦絵」に仕立てあげる。はじめの油絵が錦絵になるのもおもしろいが、ともあれ、小説のタイトルの由来は、ここにあるわけである。

女性描写といえば、大尉の残された妻について、「節子は白き看護婦の制服に赤字の徽章を施したるを纏ひ、頭は束髪に結び、足には靴を穿ち、表にこそ一点の涙痕をだも留めぬ、臉のうちには万斛の涙を堰留めて」として、りりしい姿が描かれ、「健気」「殊勝」の形容も、見られる。

第三号掲載のいま一つの小説は、漣山人の「昭君怨」である。

語り手の異碧瀾は京の高尾での紅葉狩りのおり一美人に出会う。やがて彼女が子爵藤代家の令嬢美代子であり、親友の海軍少尉候補生杉並直臣のいなずけであることが分かり、美代子の父貴族院議員栄房、祖父如松とも親しくなるが、ほどなく美代子は、保険会社の事業に失敗した父栄房の危急を救うため、「新平民の頭領」「大坂なる高利貸の大家、赤鍋某が家に嫁ぎぬ」という結末となる。

ここには、貴族の没落、新興階級の台頭という点で時勢が反映されているのみならず、「日清の戦端開けて」直臣が海軍少尉に任じられ戦地に赴いた留守に悲劇が起きているわけで、戦争の蔭は前作「吾妻錦絵」以上に深く物語に食い込んでいるといわなくてはなるまい。

美代子について、「口元のきりゝとしたるに、鼻筋の飽くまでも通れる、名匠の彫りし阿弥陀仏に似て、一種の威厳を備えな

がら、中に得ならぬ愛敬を含めり。膚は雪の只白きのみにはあらで、底に紅を包める様、さながら春の曙に、遠山の桜を見たらむが如し」とあるのは、やや類型的な女性描写といえよう。やがて「面の色や、蒼ざめて、さしも涼しげなる眼の、少し窪みたるに、此の日頃の心労も見えて、左の無名指の指輪のみ、淋しげに光を放てり」と変わるのは、悲劇の余兆である。美代子の選択を「健気なる覚悟」と称えるのは、前作と通うところがある。

『太陽』第四号掲載の幸田露伴「新学士」は、卒業したての学士の生態を諷した作品だが、「電気灯瓦斯灯の光輝き渡れる御代」という叙述はあっても、太陽や月の描写はなく、女性も登場しないので、ここでは、分析の対象からはずさざるをえない。

遅塚麗水「芦花」は、平壤の官妓芦花が「一顰一笑の為に家を失ひ身を亡ぼせるもの数知れず」という「妖女」であったうえ、監司にもなびかなかつたのでついに斬死にあらうという筋である。楊貴妃伝説に類

似しているが、舞台を「韓国」に設定しているのは、当時の時代相と関わっているよう。事実として、作者は、日清戦争に従軍したおり「朝鮮内地を跋涉して」、この小説の材を得たことが記されている。

芦花の顔立ちには、「眼は白玉に漆を点したるごとく麗しく、眉は不断の黛に描かれしがごとく翠濃かに、桃の華を啣みしかと思はるゝる小さき唇時に咲ひて、真珠を連ねし歯を露はせば、豊やかなる頬一面の微笑は小々波のごとく笑渦を漂はして、眼もとに滴たる愛敬の露多し」とされ、大陸的な表情の豊かさがある。

また、芦花は月との結びつきが深い。彼女が監司に呼ばれるのは「大同江辺の練光亭は一しは月明多し」という夜であり、その住まいは「月明くして肩（とぼそ）に映る柳の糸に風の影ある辺」である。「芦花は月にして他の美人は星なりけり」という直接のたとえも見られるし、彼女が投げられた大同江では、「秋風月明、水上時に弹琴の声を聞く」という口碑が生まれる。ヒ

ロインは月下美人なのである。

『太陽』第五号掲載の塚原夢洲「他流試合」は、江戸時代にさかのぼる時代小説であり、本稿のモチーフからは遠いので、省略する。

もう一つの小説は、樋口一葉の「ゆく雲」である。野沢桂次は、東京遊学中、下宿の継娘お縫にひかれるが、お縫の方は継母に痛めつけられて育ち「岩木のやうなる」自己抑制がはたらいで、素直には応じない。桂次は、思いを残しながら、学業途中で甲府八王子で酒造を営む養家に帰り、「容貌のわるい」お作と気の進まない祝言をあげなくてはならなくなる。「我は世を終るまで君のもとへ文の便りをたゞざるべ」しという桂次の約束だったが、はじめ繁かった便りもだんだん間遠になり、はては、年始と暑中見舞いだけのつきあいになつてしまふのであつた。

結末に「世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに掻きくもりて、傘なき野道に横しぶきの難儀さ、出あひし

物はみな其様に申せども是れみな時のほづみぞかし」という叙述が見える。男の比喩

として太陽が引かれてはいるが、朝日ではなく夕日であり、それが「にはかに掻きくも」るさだめなさに、一葉独自の観察と位置づけがうかがえる。これに対して、お縫が「不器用なればお返事のしやうも分らず」とすげなく引き退いたときの情景描写は「腰ごろもの観音さま濡れ仏にておはします御肩のあたり膝のあたり、はら／＼と花散りこぼれて前に供へし櫛の枝につもれるもをかしく、したゆく子守りが鉢巻の上へ、しばしやどかせ春のゆく衛と舞ひくるもみゆ、かすむ夕べの朧月よに人顔ほの／＼と暗く成りて」と続き、女性イメージで満たされている。女は月、それも朧月であつて、しかも、やがて「暗く成」という推移には、一葉文学における女性の特質がこのうえなく端的に暗示されているといえよう。

おわりに

これまでの検討をかえりみれば、『太陽』は男性中心の雑誌であるが、文芸欄、小説を主軸として次第に女性作家も顔を出し、女の立場も問題となつているといえる。太陽は、日清戦争と直結して国威発揚の契機とされるときにも、男性のシンボルとなつている。これに対して、月は女性のシンボルとされ、とりわけ女性歌人、女性作家は、旭日の一方的な強調にくみせず、これに微妙な批判を加え、むしろ月を重んじている。一葉の場合ことにこの傾向が顕著で、本稿で取り上げた小説の他でも、「別れ霜」「たま襷」「軒もる月」「十三夜」などでは、月がほとんど絶対者の位置を与えられている。とはいへ、歴史上で、つねに女性が月とばかり関連したわけではない。天照大御神は女神でありながら、太陽神であつた⁽²⁾、近代でも、一九一一年に発表された、平塚らいてうの「元始、女性は太陽であつた」は、女性における太陽の復活宣言であつた

といえよう。他方、日本古代の宮廷文化が月の文化として栄えたのに対し、太陽をシンボルとした明治以降、天皇家と文化との関係は急速に希薄になったというパラドックスもまた否定できない。

このような歴史的文脈に照らすとき、雑誌『太陽』において、女性と月および太陽との関連は、どう推移していくのか、稿を改めて追跡しなくてはならない。

注

- (1) 谷川健一他著『日本民俗文化大系第二巻 太陽と月―古代人の宇宙観と死生観』（小学館、一九八三）においては、〈旧事本紀〉の「天神本紀」には、月神命（つきみたまのみこと）は杵岐県主（あがたぬし）等の祖とある。対馬下県直（つしまのしもつあがたのあた）の祭る日神と一対になっている（三六頁）とされている。古来、日月は一対として捉えられてきているのである。
- (2) 同右には、〈物部氏は日の神の信仰を奉じて難波に上陸し、生駒山麓に根拠地をか

まえて勢力を張っていたのではないかと推定する。そのあと東征した天皇家の先祖が物部氏を駆逐し、日の神の信仰を天皇家のものとしたのであろう（二六頁）とある。ここでは、また、〈太陽の重要性が高まってくるのは、やはり一般的にはかなり発達した文化においてなのである。そしてそこでは、太陽崇拜や太陽神話はしばしば王権との結びつきを示す〉（五八頁）とされ、〈日本神話の体系においても、イザナキ、イザナミの天父地母神話のあとにアマテラスの神話がつづき、皇室の祖神としてはイザナキ、イザナミではなく、アマテラスのほうが尊重されてきたのは、太陽神によって天父地母神話が駆逐される一つの形式とも見ることが出来る〉（五九頁）という見解が示されている。網野善彦他著『日本文化の深層を考える』（日本エディタースクール出版部、一九八六）において〈天皇が神になぞらえられており、そういう非現実的なものに従属することで、百姓なんかの共同体との相違というものを非農民民が主張した〉（一六八頁）とされる、天皇神格化のすぐれたシンボルの一つとして太陽を位置づけることができよう。